高校でのフランス語教育：現状報告

――授業の活性化と発展に向けて――

前　田　美　樹

は　じ　め　に

フランス語を教えるようになって2年が過ぎようとしている。そして現在でも「高校生にフランス語を教える」というのは，いったいどういうことなのかという問いは続いている。

実際にフランス語を教えるようになり，あっという間に過ぎていった1年目が終わり，2年目になってようやく腰を据えてこの問いに向き合え初めたところである。とはいえ答えはすぐに出るものではない。もしかすれば，この問いは，自身が教師である限り，一生続くのかもしれない。

高校のフランス語の教師というものは，高校の教師であるとはいえ，高校におけるフランス語の授業のほとんどが，限られた生徒を対象とした選択科目の一つであり，学校ではほぼ一人きりの存在であり，その他教科の先生との連携も，よほど意識して積極的に行わないかぎり，なかなか取りづらいのが現状なのではないだろうか。また一つの学校に常に勤務するというのではなく，様々な学校をかけもつ非常勤講師という立場もあり，こちらから関わりを持とうとしてゆかなければ，それぞれの学校の第二外国語としてのフランス語の教育方針を詳しく理解する，またはこちらの考えを理解してもらうというのはなかなか困難な状況である。

つまり，学校という組織の中にありながら，孤立した存在であり，ある種職人の仕事に近いものではないかとも思う。私のように，大学からフランス語を始め，フランス文学科で専門としてのフランス語教育を受けた者としては，大学でのフランス語教育の雰囲気しか知らず，免許習得のためのいくつかの授業と，実践としての高等学校における3週間の教育実習においての，決して十分とは言えない経験を糧に，フランス語の授業をつくりあげていくしかない。

このような困難さは，おそらく全ての教師，また教師に限らず，すべての社会人が経験してきたことであると言われるかもしれない。また，そのような状況は，教師としての自分の立場から見た状況であるので，授業の受け手である生徒にとっては，非常勤講師であろうが，専任の教師であろうが，教師であることにかわりはなく，全ての生徒に対して，英語や数学といった科目と同様に，その時間その時間を，実りあるものにしていかなくてはならない。それが教師としての義務であることは，周知の事実である。

その前提は常に強く心に持っているものの，やはり授業をより実りあるものにするためには，自分一人で奮闘するだけでは限界がある。そのようなときに，われわれのような若手教師をその先へと導いてくれるのが，同じフランス語を教えている人びとの存在である。自分のやり方に疑問を持ったり，壁にぶつかったりしたときに，他のフランス語教師が，いったいどのように授業を作り上げ，困難に立ち向かってこられたのかという経験を聞いたり，また色々な研究や実践成果の意見交換を行うことは，決して無駄ではないと思う。幸いにも，関西には「関西フランス語教育学会[1]（RPK）」というものがあり，私と同じく高校でフランス語を教えておられる方々ともお会いし，高校，大学，また語学学校において，どのようにフランス語教育がなされているということを知ることができ，自分の抱えていた問題点の解決の糸口が，少なからず見通すことができた。

本論考では，フランス語教師となってから1年半のうちに経験し，感じたことを振り返りながら，どうすれば授業をよりよいもの，よりよい時間にしていけるのか，またさらなるフランス語教育の発展と，日々の授業の活性化に向けて，一教師として，今後どのような取り組みを行っていくべきなのかということを自分なりに考えてみたいと思う。

そのためには，まずは現在の自分が行っている実際

の授業の現状をふりかえり，その後，自分の抱える問題点を明確にし，最後に，その問題点の解決のための方法について考えて行きたい。

Ⅰ．カリキュラムと受講人数

現在兵庫県にある私立高校の2年生と3年生，県立高校の2年生と3年生にフランス語を教えている。フランス語の授業は次のようなカリキュラムで行なわれている。まず私立女子高の場合は，高校の2年時から，自由選択の一つとして[2]，週に一回，50分×2コマ連続授業でフランス語を学ぶ。高校3年時も授業形態は変わらず，週に一回，50分×2コマ連続授業でフランス語を学ぶ。高校2年の秋に再び高校3年時での自由選択科目[3]を選ぶことになる。その時に，フランス語を続けて受講するか，他の選択科目に変更するかが生徒に問われることとなる。

一方，県立高校のほうは，国際コミュニケーションコース（通称：MIC）という，普通科の中に設けられた英語コースの生徒約40人を対象とした第二外国語としてのフランス語である。こちらは2009年まで，高校3年生MICのフランス語選択者に向けて，週2回，50分を1コマとする2コマ授業が行われている。2010年度から，新たに高校2年MICの生徒を対象としたフランス語の授業も開設され，週1回，50分×2コマ連続授業が始まった。この2年生からは，2年生でフランス語を選択した者のみが，3年生でもフランス語中級という，新たに設けられた授業を3年次に選択することができるという，カリキュラムの変更がなされた。

次に受講人数を見ていきたい。去年今年の受講生の数を挙げると，私立高校では，2年フランス語選択者は2009年には14名，2010年には7名。3年の選択者は2009年10名，2010年5名となっている。

私立高校フランス語	2年生選択者	3年生選択者
2009年度	14	10
2010年度	7	5

2009年の14名のうち，高校3年でそのままフランス語を選択したのは14名中4名。1名が3年から新たにフランス語を選択した。

県立高校の場合は，2009年は高校3年生19名がフランス語を学んだ。2010年は，24名が学んでいる。高校2年生のMIC生徒を対象に新たに始まったフランス語の初年度の生徒数は，6名となった。

県立高校フランス語	2年生選択者	3年生選択者
2009年度		19
2010年度	6	24

このように，受講人数を見ていくと，この2年間で全体として，受講生徒の数が減ってきていることが分かる。どちらの学校も，2年，3年と継続してフランス語を受講する生徒はそのうちの半数以下にとどまる[4]。また，県立高校の方では，カリキュラムの変更がなされた結果，授業数は増え，2010年度の3年生の受講人数も増えたのだが，今年開設された2年生の受講人数は，こちらの期待を下回る6名にとどまった。また，2011年度からは，2年生の6名のうちから3年次に新たに開設された「中級」クラスを受講することができるのだが，その代わりにフランス語を3年生から新たに受講するということはできなくなった。この秋行われた選択希望調査にて，6名のうち，1名しか継続選択を希望しなかったために，来年度のフランス語の「中級」授業は開講されないことが決定した。結果的に，今後の授業コマ数の減少，受講人数の減少が予想されることとなった。

せっかく2年間フランス語を学ぶ機会があるにもかかわらず，「フランス語は難しい」などといって，選択変更をする生徒は少なくない。この経験から，フランス語学習者にとって，初めの1学期間がどれほど大切なのかということが分かってきた。フランス語学習に対して，初めの段階でマイナスのイメージを与えてしまうと，次の年も勉強しようという意欲になかなか結びつかない。より多くの生徒に続けて勉強してもらうためにも，われわれ教師は，初めの段階で，分かりやすい授業を心がけ，生徒の心を捉えるような魅力的な授業を行うといった工夫が必要である。

このような現実に加え，高校での第二外国語としてのフランス語の特徴として挙げられるのは，特に2年目のクラスでは，2年目の生徒と，新たに3年生になってからフランス語を選ぶ1年目の生徒が一つのクラスの中で混じり合うことである。その場合，異なったレベルの生徒を同時に指導するという難しさがある。実際に昨年度，今年度の3年生の授業で，初心者と2年目の混合クラスを担当したが，少人数ということもあり，初心者の生徒に対して，できるだけ声をかけたり，補足説明を加えるように心がけた。また，すでに学習したことのある項目であれば，生徒同士で助けあ

うように促し，授業を進めて行った。どちらの生徒のレベルに合わせればよいのかなど，とまどうことも多く，このような混合クラスは，今後も予想されるので，それを見据えた適切な指導法を早急に考えなければならない。

また，私立高校などでは，フランス語の選択授業に，海外からの交換留学生が飛び入りで参加することも少なくなく，フランス語の授業の説明を英語で行ったりする機会がしばしばあった。このような現実に，戸惑うことも多かったが，様々なレベルの生徒が同じ一つのクラスでフランス語を学ぶという現実を踏まえた，柔軟性のある授業計画が求められるし，フランス語の教師とはいえ，今後ますます進んでゆくと予想される国際化，多文化化を見据えて，英語，またそれ以外の語学にも通じるのが理想であるだろう。

このように，フランス語を受講する生徒の人数や傾向は，毎年変化する。また，カリキュラム自体が，突然大幅に変更されることがある。そのような変化に対応できるような柔軟性と，授業に対する高度な技術が高校のフランス語の教師には必要なのではないだろうか。

Ⅱ．授業について

授業については，それぞれの学年や学校に合わせて，一年間でどのような目標を持って，どのような計画で授業を作り上げていくかを考えた。その時，基本的な目標として掲げたのは，「フランス語に親しむ」というものであった。今思えば，あまりにも漠然とした目標であり過ぎるなと感じるが，まずその目標に合わせて大まかな年間計画を立て，そのあと，それぞれの学期での内容を考え，それから月単位，週単位，一日単位と時間単位で，何をやるのかということを決定していった。

実際に4月になり，授業が始まってから，初めの授業で生徒に，なぜフランス語を選択したのか，授業ではどのようなことをやってみたいのか，フランスについて既に知っていることは何か，またこの一年の学習目標などを簡単に聞くアンケートを実施した。そのアンケートの結果をみたり，生徒と実際に接してみて，予め考えていた計画に，生徒が興味を持っているものを加えたりして，修正を加えた。生徒の興味で多かったものは，「フランス料理」，「フランス菓子」，「サッカー」，「フランス語の音」，「フランス映画」などであった。授業の計画を行う際に，このような生徒の興味を，どのようにして授業に取り入れていくかを考えた。

授業を実際に行っていく上で，必要になってくるものは教科書である。だいたい次年度の見通しが出てくる前年の秋ぐらいから，様々な教科書見本を手にとり，使用する教科書を検討する。教科書を決定する時期は学校によって違う。早い学校では，前年度のうちに，生徒の人数も状況もわからないままに，教科書を決めなければならないことがある。そうでない場合は，4月の初めの授業で初めて生徒に会って話したり，アンケートによって希望を聞いたりして再検討し，そこから手配する。生徒の手元に届くのは，だいたい4月の2週目，3週目くらいとなる。

初めてフランス語を教える場合，教科書選びはなかなか難しいものがある。「授業は教科書を教えるのではなく，教科書で教えるものだ」と繰り返し言われるように，やみくもに教科書にがんじがらめになるのも危険だが，若手の教師がいきなり自作の教科書を作るのも経験が浅いため，難しいものである。

高校では，教科書は検定教科書の中から選ばれるのが普通である。しかしフランス語の教科書は，他の教科のように，検定教科書というものが存在しない。それゆえ，フランス語の教科書は副教材として扱われる。値段も他教科のものに比べれば，安くない。また，明確に，「この教科書は高校生のためのものです」というものも，あまり多くはなく，ほとんどの教科書が，大学でフランス語の授業を想定して作られている。最近では多彩な教科書が出版されているが，その中で，高校生が50分間の授業で，無理なく学習を進めていけるものを選ぶ必要がある。

2009年度では，私立高校の3年生には，『*A la découverte* 発見！フランス語教室』[5]を使用した。この教科書は，ディアローグが物語仕立てになっており，そのディアローグを演じていく上で，自然にフランス語のしくみを身につけていくというものである。教授用備考書も付属してあり，丁寧に授業の進め方も示してあるとても親切な教材である。高校2年生には前任の先生が使用されていた『メビウス』[6]を引き続き使用した。『メビウス』は，フランス語の初級文法を無理なく一年で学べるように工夫された教科書である。文法の複雑な規則などは省いてあるところもあるが，そこは自分で内容を足していくという形で使用した。また2010年度には，高校3年生では『*Méthode de français* －フランス語の方法』[7]を使用し，高校2年生には，昨年と同様に『メビウス』を使用した。県立高校では2009

年，2010年とともに，すべてのクラスで『メビウス』を使用した。

現在教科書選びで考慮していることといえば，1年でできるだけ様々な角度から学習して欲しいという思いから，ディアローグ，発音練習，練習問題，文法説明，がバランスよく配置してあるものを選ぶということである。文法だけの教科書や，会話だけの教科書，また文化に比重が多く置かれているものも存在するが，フランス語が週に多くて2コマという状況で，何かに限定するというのは，危険である。そのような考えから，1年間という限られた時間を有効に使用しながら，初級のフランス語をなるべく様々な角度から学習できるように，総合教材を選ぶようにしている。

また，フランスの地図，パリの地図，かわいらしいイラスト，古すぎない写真などがあり，最後にはフランス語の活用表があるものが望ましい。とはいえ，自分の希望を100%かなえてくれる教科書はそうあるものではない。それは今後自分が経験を重ねて行く上で作り上げていくものであるので，自分自身としても様々な教科書を使用して行く上で，自分のオリジナル教材，オリジナル授業を作り上げるつもりで，足りないものには自分で足し，また引くことをしなければならない。

教科書選びは，その授業でどのような目標を達成したいかに大きく関わってくるのだが，1年目では，選んだ教科書を進めていくだけで，精一杯の状態であった。『*A la découverte*』は，数少ない高校生も対象にした教科書である。高校生のときにフランス語を勉強した友人などがこの教科書を使用し，授業がとても楽しかったというのも耳にしたりしたので，採用することにした。

しかし，自分自身がこの種の教科書に慣れ親しんでいなかったことと，事前の教材分析が不十分であったために，授業を進めるときに，少なからず困難さを感じることがあった。後になって，実際にこの教科書を作られた方々にお会いするようになってようやく，この教科書の面白さや，意図，特徴などを理解するようになったのだが，教師である自分自身が，教科書を使用する意図や目的を明確にできていなかったため，生徒がこの教科書をきちんと理解し，親しみ，力を付けるように活用させることができなかったのではないかと今では思っている。教師が困難さを感じていることを，生徒は敏感に感じ取る。この経験を通して，強く感じたのは，教師がその教科書の内容や意図を十分に理解しなければ，生徒には何も伝わらないということである。教材研究の重要さを痛感した教材であった。

1年目は，教科書に加えて，生徒の興味をできるだけ取り入れようと色々と授業中に文化のプリントを配布したり，フランス料理のレシピを読んでみたり，シャンソンを歌ってみたり，詩を読んでみたり，フランス映画の『アメリ』[8]を鑑賞したりしたのだが，生徒がこちらの期待していた通りの反応を示してくれたのは，あまり多くはなかった。色々な下調べや準備をして苦労したつもりになっていた割には，生徒にそれが伝わらなくて，落ちこむことがあった。それゆえ，2年目では，あまり気軽に文化事項を取り入れられなくなっていたのも事実である。

今になって考えてみると，このような生徒の興味がある事柄でも，きちっとした授業の流れの中に，自然と組み込んでおかなくては，突拍子のないものになったり，単なる息抜きの時間のようなものになってしまう。せっかく作ってきた授業のペースを壊すことになりかねない。また，教師の側が，どこかの教材から見つけてきたようなものをそのままコピーして，配布し，説明するというのは，ちっとも面白くないものなのだということがわかってきた。生徒の興味のある事柄を，細切れに提示するのではなく，普段の教科書で行う学習と，授業と授業の間に行う文化の時間を，上手にリンクさせ，また，語学指導の場合と同様に，文化事項を授業で取り入れる場合は，より丁寧な下準備をもって計画していくように，これから更なる研究が必要であろう。また，英語の授業などでよく取り入れられているゲームなどを，フランス語でも取り入れられないかと考えることもある。英語の場合は，様々なゲームやアクティビティを集めた教材が数多く出版されている。フランス語の教材では，そのようなものはあまり見かけない。今後のためにも，フランス語学習のためのゲームやアクティビティをどんどん集めて，一つのレシピ集のようなものが作れるようになりたいものである。

何かを学習するときには，3つの段階がある。まず予習があり，授業があり，復習がある。生徒の学習方法を考えたとき，中学生での英語の授業を参考にしたりした。予習の段階では，生徒になるべく次の授業で勉強する内容に目を通し，ディアローグや基本例文などをノートに写し，予め次の時間に行う内容のCDを聞いて来るように指示した。予習の段階でまず問題となったのは，新出単語の意味をどう調べるのかということである。かつて自分が大学の専門でフランス語を勉強したとき，はじめに辞書を買うことが必須であ

った。授業の最初では，辞書の引き方なども丁寧に教えてもらった記憶がある。けれども，週一度か二度の授業のために，高い教科書を買った上で，辞書の購入を義務とすることに，遠慮してしまった。もちろん意欲のある生徒には，辞書の購入をすすめたが，教科書に出てくる新出単語は，毎回こちらがプリントを作って用意した。辞書が活用できるようになるということは，大切なことだと思う。しかし，今は辞書を買わせるか，単語プリントを今後も作って配布するのか，まだ迷いがある。他の先生とも今後相談して，決めていかなくてはならない。

評価についても，初めはなかなかどうしてよいかわからなかった。評価の基準も，学校によって違う。英語科の評価基準に合わせて評定を出さなければならない場合もあれば，完全にこちらにまかせられているものもある。フランス語の場合，1学期だいたい20時間前後の授業があるのだが，中間テストは行わずに，期末テストだけを行っている。なので，中間・期末テストの点数を重視している高校などでは，フランス語の評価を，一度きりの期末テストだけに依らなければならない場合もある。そんな危険を避けるために，自分なりの評価の方法を確立しなくてはならない。定期テストに加えて，2週に一度，授業のはじめに簡単な小テストを行っている。1学期間にだいたい10回の小テストを行う。また，中間テストの代わりに中間ノート提出と，期末テストの後にもノート提出をさせる。小テストと，普段の授業態度と，ノートをきちんとまとめられているか，というのは，平常点に入れている。

なるべく客観的で公平な評価ができるように，データはパソコンのエクセルでまとめて，分かりやすく管理している。とはいえ，今後はもっと評価に関しては研究していかなくてはならない。テスト作り，評価基準作り，評価方法など，さらなる改良が必要である。

Ⅲ．見出される問題点の解決に向けて

これまで，この2年間の授業を振り返って感じたことなどを書いてきたが，フランス語を教えるというときに教師に必要なものとは何かと考えた。まず最初に大切なのは，「自分自身の確立」ではないだろうか。まずなぜ自分がこれまでフランス語を学んできて，また教えているのか，という自分とフランス語の関係を明確にしないかぎり，前に進めないのではないのかと考える。それを突き詰めない限り，生徒に対してフランス語を教えるという必然性が生まれないのではないだろうか。もしその時に，自分がフランス語を勉強していて楽しいと感じたり，必然性を感じなかったとすれば，結果的に魅力的な授業など行えないような気がするのである。それゆえ，まず「自分にとってのフランス語」をはっきりさせる必要があるのではないだろうか。

そして常に，語学力，知識，に対して常に新しい情報を収集し，それを授業に取り入れていくということができなくてはならないし，フランス語の研究だけでなく，教えるための技術の向上，また，一人間としてモラルや，心や精神の成長を続けていくことは，教師としての資質として必須のものである。そのためには，どんどん色々なことに挑戦し，様々な経験を増やしていくことが大切である。一度きりの高校生活の貴重な時間の一コマであるフランス語の授業を，残念な時間にしてはいけない。そのためには，毎授業後，毎学期後，毎年度後に，自分の授業について，振り返り，きちんと反省していかなくてはならない。

また，新たな挑戦は時に，思わぬ喜びをもたらしてくれる。この論考を書いている間に，生徒2人が西日本フランス語コンクールに出場した。自分自身もはじめてこのコンクールに生徒を参加させたのだが，お互いに初体験での参加だったにもかかわらず，入賞することができた。教室では見られない生徒の生き生きした表情と，成し遂げたという充実した表情を見ていると，暗唱コンクールに出場して本当に良かったと感じたし，教師としての自分にとっても，貴重な経験となった。また，違う学校でフランス語を学ぶ高校生同士が初対面にもかかわらず，会場で気さくにコミュニケーションを取ったりしている様子を見て，高校生のポテンシャルの高さを感じた。やはり，新たなことに挑戦することは，大切である。そして，新たな出会いも大切なのである。このようなコンクールだけでなく，仏検に挑戦する生徒も年々増えてきた。普段の教室での学習だけでなく，教室を飛び出しての生徒の挑戦を目の当たりにし，こちらも身が引き締まる思いである。

また，この2年間で強く感じたのは，コミュニケーションを積極的に取るということの大切さであった。まずは，学校とのコミュニケーションである。フランス語の教師というものは，なかなか学校という組織にから孤立しがちである。やはり初めのうちは，授業を行う教室の希望を言い出せずに，DVD教材の使用を見送ったり，生徒のリクエストに答えて，簡単なフラ

ンス料理を作ろうということになったとき，他教科の先生との連絡がうまくできずに，直前になって，調理室が使用できなくなり，生徒に失望を与えてしまったという失敗があった。それらはどれも，遠慮というか，こちらの意図を理解してもらう努力が不足しておきてしまった失敗であったと思う。そのような失敗を繰り返さないためにも，まず自分自身がオープンであることが大切である。他教科の先生の中には，フランス語の授業にたいするイメージができあがってしまっている場合がある。「どうせビデオを見るだけ」だと思われていたり，常にゲームばかりしているのだと思われたりしたこともあった。また，設備の整った教室が割当てられて喜んでいたら，急に教室が生物教室に変更になったりもした。こういうことは，フランス語という科目が，普段どのような目標をもって，どのような授業を行っているのかということを，他の先生にわかってもらうことで，解消されることだと思う。それゆえ，その無理解と誤解を解消するために，こちらから積極的に，フランス語の授業を公開し，アピールしていかなくてはならない。

昨今のフランス語を取り巻く状況は，とても厳しいものがある。英語とは違い，いつ授業がなくなってしまうかわからないといった，不安定な状況の中で，われわれは授業を行わなくてはならない。また，いつまでたっても非常勤講師という立場のままで，自分の人生の未来図が，描きづらいのも事実である。そんなときに，再び問われるのが，自分自身とフランス語の関係である。そこに揺るぎない関係性があるかぎり，なんとかこの困難な状況を乗り越えることができる。また，そんな状況であるからこそ，一時間一時間の授業の大切さが非常に大きくなってくる。その時間の大切さを誰よりも認識しているフランス語の教師だけが，この状況を乗り越えられるのではないだろうか。

おわりに

本論集では，今回敢えて，自分の経験を中心に述べることにした。それはなかなか普段，それぞれの学校のフランス語教師が，それぞれの学校の現状を知る機会に恵まれないからである。それゆえ，論文というよりは，レポートに近い内容になったと思う。けれど，今のフランス語教育の世界では，もっと具体的な実践を報告し合える環境が，とても大事であると考えたからである。

自分のフランス語教師としてのキャリアはまだまだ始まったばかりである。これまでこの2年のフランス語教師としての経験を振り返ってみて，まだまだ学ばなければならないことの多さに気が付いた。

また，フランス語教育の分野はまだまだ発展する余地を残していると感じている。大きな枠組として考えても，教師ひとりひとりが教育を行っていく上でも，まだまだ環境整備が整っていない感が拭えない。決してメジャーに成り得ないとしても，一つの外国語としてきちんと存在しているフランス語という教科を，安定的に生徒に提供するための努力を，これからますます行っていく必要がある。

フランス語を教えることになる少し前から，英語の中学・高校の教員免許の習得に向けた勉強をはじめた。そして今では，英語の免許を習得することができた。その中で2度目の教育実習を経験し，今のフランス語の授業でも生かせるような，とても有益な経験をすることができた。この英語での経験は，決して無駄にはならないだろう。ただ状況を嘆くだけでは何も生まれない。この状況に不満があるならば，後ろむきな意見交換ばかりではなく，未来を見据えた，具体的で実践的な意見交換を行ってかなければならない。フランス語教育の発展のために，これからの若手のフランス語教師は，常によりよい授業，よりよい教育を目指して，日々努力しなければならない。そしてその努力こそが，現在の状況を改善し，今後高校でのフランス語教育が発展していくための唯一の方法なのではないだろうか。

注

1）Rencontres Pédagogiques du Kansai（関西フランス語教育研究会）は，毎年3月に2日間にわたるフランス語教育の研究会を行っている。

2）木工芸・英語演習・食物・大学講座・仏語の選択肢の中から選ぶ。

3）漢文演習・日本史B・物理Ⅱ・センター生物Ⅰ・クラフトデザイン・英語演習・大学講座Ⅱ・フランス語の中から選ぶ。

4）2年時の秋に，希望調査が行われ，3年時に継続してフランス語を選択するかどうかが問われる。近頃は選択科目の選択肢も増えつつあるので，選択フランス語の置かれている状況は非常に厳しいものがある。

5）『*A la découverte* 発見！フランス語教室（CD付き）』，中井珠子，川勝直子，中村公子，横山祥子著，第三書房，2004.

6）『メビウス』，甲斐基文著，第三書房，2008.

7）『*Méthode de français* − フランス語の方法』，Vincent Durrenberger　著，駿河台出版社，2010.

8）『アメリ』，ジャン=ピエール・ジュネ監督，フラン

ス，2002.

教　　材

・『*A la découverte* 発見！フランス語教室（CD 付き）』，中井珠子，川勝直子，中村公子，横山祥子著，第三書房，2004.
・『メビウス』，甲斐基文著，第三書房，2008.
・『*Méthode de français* − フランス語の方法』，Vincent Durrenberger 著，駿河台出版社，2010.

参 考 文 献

・『フランス語をどのように教えるか』，中村啓祐・長谷川富子著，駿河台出版，1995.
・『教えるということ』，大村はま著，共文社，1972.